

図書 紹介

科学研究とデータのからくり

日本は不正が多すぎる!

著者：谷岡一郎(学校法人谷岡学園)

発行：(株)PHP 研究所 / 〒135-8137 東京都江東区豊洲 5-6-22 / 電話 03-3520-9615 /

新書判 / 229 頁 / 価格 780 円 (税別) / 2015 年 10 月 1 日発行

科学者はなぜうそをつくのか。研究者たちはどうやって人を騙すのか。どう切り抜けようとするのか。世間を騒がせた事件を中心に、どこまでが単なるミスで、どこからが犯罪になるのか。過失と不正の評価をわかりやすく表にして解説している。

研究者の不祥事は忘れた頃に事件が起こる。STAP 細胞事件、ノバルティスファーマのデータ改竄事件、厚労省が記者発表したギャンブル依存症問題など捏造や不正が多すぎる現状に著者は、日本では不正は起こしやすく、発覚してもペナルティが甘いからだといひ、根本的には、日本の「研究費助成」のシステムが原因であると述べている。

序章 研究者とミスコンダクト—本書の内容について

第 1 章 研究者の過失と不正—「たちの悪さ」のレベルについて

第 2 章 研究者の礼儀と掟—STAP 細胞事件

第 3 章 企業スポンサーと研究費—ノバルティス事件

第 4 章 事実の一般化と挙証責任—ギャンブル依存症 536 万人問題を中心として

第 5 章 パワーポリティクと研究者—むすびに代えて

次にサブタイトルを見ていくと、序章は、不正は簡単 / 中東の天才—アルサブティ / 本書で扱う 3 つの事例 / ミスコンダクト / ミスコンダクトの概念的フレームワークなどである。

第 1 章は、研究者の不正とその土壌 / 自然科学と社会科学 / 「たちの悪さ」を表す 5 段階レベル / <レベル①>—単なるミス / <レベル②>—未熟・不作法 / <レベル③>—ずさん・一方的 / <レベル④>—意図的ミスリード / <レベル⑤>—犯罪的行為 / 下品な行為—掟破りの別次元である。

第 2 章は、世界の不正事件 / STAP 細胞事件の概要 / ピアレビュー / 査読 / 追試は新しい知見に非ず / STAP 細胞事件の祭典 / なぜ不正行為を行ったのか / 周囲がエライと自分のレベルが上がる / 息を吐くように口からウソが出る人 / 性悪説は不可能などである。

第 3 章は、スポンサーの存在 / 結果へのプレッシャー / ノバルティス事件の経緯と問題点 / 各大学の内部調査 / 調査方法論 / 調査の限界とペナルティ / 厚労省と大学 / スポンサー

の存在と研究／ノバルティス事件の影で安心した人びと／キャリアパスなどである。

第4章は、エセ事実の一人歩き／疑似科学／知の欺瞞／表面的妥当性／厚労省の「ギャンブル依存症 536 万人」記者発表／調査目的の問題点／図表への疑問／レファレンス・ピリオド／事実の一般化／帰納と演繹／パラダイムシフト／社会科学理論の一般化／挙証責任／社会科学と挙証などである。

第5章は、政治と歴史／歴史的事実／日・中・韓の歴史的研究／メディアの世界／挙証のプロセス／事実認定機構／ほめられるべき事例／過ちは前進なりなどである。

STAP細胞事件以来、研究不正や研究倫理に関する本が多く出されているが、本書は、著者が社会学者という文系の視点で分析している点が特徴である。学術研究の世界では、不正は少なくないという。性善説からなっているという研究者の社会では、ウソをつく性癖のある人が不正をしようと思えばできてしまう。また、大半の論文は、発表後たいして注目もされず、そのまま忘れられてゆくのであまり問題になっていないだけであるという。

著者の思い入れも強く、思想的な片寄もあるが、提起されている点は、重要と思われることも多く、文系、理系に限らず研究不正をなくしていくための対策を考える材料の一つとしては有用な本であり、対象の大学院生、大学生、高校生だけでなく、指導する立場の会員諸氏にも是非一読をお願いしたい。

巻末の参考・引用文献の1つ「科学のミスコンダクトー 科学者コミュニティの自律をめざしてー」（財日本学術協力財団編）は、本誌35巻4月号（2007年）に紹介されているので、参照されたい。

なお、最近、STAP細胞事件の小保方晴子氏の著書「あの日」（講談社、2016/1/29）が話題になっているので、少し古いが本書を紹介した。（学会事務局）